

令和3年度

一般入学試験

国語

時間：50分
満点：100点

受験についての注意

- 1 試験開始の合図があるまで、問題用紙を開かないでください。
- 2 問題用紙は11ページ、問題は一～三まであります。
- 3 開始の合図があったら、まず解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。
- 4 試験中、問題用紙の印刷が見えにくい、または文章等で不明な点がある場合は、手をあげて監督者に知らせてください。ただし、問題に関する質問には、いっさいお答えできません。
- 5 各問題とも、解答は解答用紙(別紙)の所定欄に記入してください。
- 6 終了の合図があったら、ただちに筆記用具を置き、監督者の指示にしたがってください。
- 7 解答用紙だけ回収します。問題用紙は持ち帰ってください。

一次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

社会は私たちが快適に生活できるような長い年月をかけて作り、維持してきた人工環境である。丁度、魚が水の中でしか生きられないように、人間も社会なしには生きてゆくことができない。ジャングルで生き抜くためのサバイバルの知識でさえ、社会から与えられるものだ。一言で言えば、人間とはまさに社会的動物である。社会を作って生活する動物というだけでなく、社会なくしては生きられない動物という意味である。社会とは、私たちを生かしてくれる生命維持装置そのものである。

ところが、この社会には冷酷な一面がある。私たちは何らかの組織や地域への所属を通してより広い社会へとつながっているが、それぞれの所属集団から嫌われたり、疎まれたり、邪魔にされることがあるのだ。

社会心理学者のパウマイスターらは、個人が集団から排斥される三つの要因を挙げている。一つは「集団の存続や福祉に貢献できない」ことであり、要するに、特定の仕事を任せられているのに、これを成し遂げる能力に欠ける場合である。仕事の上で失敗ばかりしていれば、当然、研修を命ぜられたり解雇されたりする。

二つ目は、「協調性や道徳性の欠如」である。社会のルールを何とも思わない無法者である。人々の平安な生活を守るため、こうした人々を一定期間、あるいは生涯、ペナルティとして一般社会から隔離する制度をほとんどの社会が持っている。

最後に「対人魅力の欠如」である。極めて広くあまいな基準であるが、主として快適な人間関係を維持する上での問題だ。わがままでトラブルばかり起こす人物はパーティーに招かれなくなる。不潔で悪臭を放つ人物も、人々から敬遠される。

社会や集団から排除されると、獲得できる社会からの恩恵も減り、快適な生活を送れなくなる。時代や地域によってはそれがすぐ死に直結する。

従って、自分の中に「集団の存続や福祉に貢献できないこと」や「協調性や道徳性の欠如」、A、「対人魅力の欠如」につながる何らかの要素を見つけると、個人は強い不安にかられ自己を改善しようとする。

たとえば、「自尊心」は自己が社会に受け入れられているか否かを示すバロメーターであると考えられている。困難な仕事をやり遂げて人々から感謝されると自尊心は高まり、友人と喧嘩をすると自尊心は低下する。自尊心の持つこうした働きを「社会的な計測器」という意味で「ソシオメーター」とよぶ。しかし、もつと、状況に即応して反応する敏感なソシオメーターも必要だ。

言うまでもなく、それが羞恥心である。羞恥心は自己の中に社会から排斥されそうな要素がないかを監視していて、何か問題を見つけたと「恥ずかしい」という警報を発する。極めて早期の段階から危機を発見できる優れた警戒システムと言える。転んでも、褒められても、

仲間が失敗しても、他者を見る自己の視線にも、敏感に反応して修正をセマ^Bってくる。

^②羞恥心は単なる自己顕示欲や虚栄心といった世俗的なプライドを守る道具ではない。人類が社会に依存して生きることを決めたときから、世代を重ねる中でアップグレードされてきたシステムである。進化心理学の視点から考えてみると、恐らく人類史の中で敏感な羞恥心を持たない人物は、社会から排斥されその形質を後世に伝えることができなかつたはずだ。これが繰り返される中、より優秀な羞恥心の持ち主が社会の中で生き残り、このシステムはさらに洗練されていったものと考えられる。

今、私たちが使っている羞恥心のバージョンはこうした歴史の産物であり、人類が社会的存在であることを色濃く反映している。それがゆえに、羞恥心の研究は、まさに人間の社会性を研究することにつながるのだ。

^Cちなみに、人間のコミュニケーション能力であるが、その起源は直立歩行にあると言われる。立ち上がることで喉の奥の空間が広がり、フクザツな音声を発することが可能となつて言葉が生まれた。

その直立歩行であるが、こんな説がある。かつて私たちの祖先はアフリカ大陸の森林地帯で生活していた。樹上は食物も豊富で、^Dテンテキもいない。まさにサルたちの楽園がそこにあった。^B地殻変動の影響で森林地帯を東西に隔てる山脈が育ち、東側が乾燥して次々と森林が枯^かれていった。丁度、そこで生活していたサルたちは樹上という楽園を追われ、しかたなく危険な地面の上で生きてゆくことになる。このとき彼らは周囲の様子を広く眺めるために直立し始めた。そのサルたちこそが人類への道を進み始めたというのだ。

フランスの古生物学者、イヴ・コンバス博士が描き出した「イーストサイド・ストーリー」と呼ばれる人類誕生のシナリオである。学会の中で異論は少なくないが、^③実に壮大でドラマティックな話である。このシナリオによれば楽園追放後、私たちは社会という新たな楽園を手に入れるわけであるが、これが妙に旧約聖書の失楽園のエピソードと重なり合う。

神が禁止した知識の実を食べてしまったアダムとイヴは、自らが裸であることに気づきイチジクの葉で陰部を覆う。この様子を見た神は彼らが言いつけに背いたことを悟^Eり、楽園から追放する。かじりかけの木の实を持って恥じらうアダムとイヴの姿は多くの宗教画のモチーフともなっているが、羞恥心は人間が他の動物たちとは異なる存在になり、独自の道を歩きはじめたことを象徴しているようだ。

とにかく、神話の世界でも現実の世界でも、恥ずかしさは人間にとって切っても切れない感性である。恥じらいをきっかけに^{注1}棲家^{すみか}を失った私たちが、また、恥じらいによって社会を作ることができたとも言える。もしかすると、^④羞恥心とは、エデンの東の地で人類が生き延びて行くため、神様が^{せんべつ}餞別として与えてくれた道具だったのかもしれない。

注1 エデン … アダムとイヴがいた楽園。

^{すがわらけんすけ}菅原健介 『羞恥心はどこへ消えた?』より

問一 二重傍線部A～Eのカタカナは漢字に直し、漢字には読みがなをつけなさい。

問二 空欄部 A・B に入る語の組み合わせとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア A そのため B そして
イ A あるいは B ところが
ウ A すなわち B たとえば
エ A または B つまり

問三 傍線部①「社会とは、私たちを生かしてくれる生命維持装置そのものである」とあるが、筆者がこのように述べる根拠は何か。その根拠を述べている連続した二文を本文のこれより後の部分から抜き出し、その初めと終わりの各五字を答えなさい(句読点を含む)。

問四 傍線部②「羞恥心は単なる自己顕示欲や虚栄心といった世俗的なプライドを守る道具ではない」とあるが、では「羞恥心」とはどのようなものか。「警戒システム」「修正」という語句を用いて、六十字以内で答えなさい(句読点を含む)。

問五 傍線部③「これが妙に旧約聖書の失楽園のエピソードと重なり合う」とあるが、このことについて説明したものとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア コンバス博士の人類誕生のシナリオで、サルが楽園から追われた結果、直立し始めたように、旧約聖書の失楽園のエピソードでも、人間は、楽園を追放された結果、羞恥心を持ち始めた。

イ コンバス博士の人類誕生のシナリオで、サルが人類への道を進み始めたことは、旧約聖書の失楽園のエピソードで、人間が社会的動物として生きていく道を選んだことを象徴している。

ウ コンバス博士の人類誕生のシナリオと旧約聖書の失楽園のエピソードでは、人類は困難に直面したことで、他の動物たちとは異なる場所で生きていくことを選んだとされている。

エ コンバス博士の人類誕生のシナリオでも、旧約聖書の失楽園のエピソードでも、楽園からの追放をきっかけに、サルも人間も他の動物とは異なる存在として、独自の道を歩むことになった。

問六 傍線部④「羞恥心とは、エデンの東の地で人類が生き延びて行くため、神様が餓別として与えてくれた道具だったのかもしれない」とあるが、どういうことか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人類は、知識の実を食べたために神の怒りを買ってエデンの楽園から追放されたが、神は追放するだけでなく羞恥心まで与えたので、人間は、他の動物とは違う道を歩いて苦しむことになった、ということ。

イ 人類は、恥じらいを知ったために神によってエデンの楽園から追放されたが、代わりに羞恥心を与えられたことで、他の動物とは異なる存在となり、神から独立して生きていける能力を得た、ということ。

ウ 人類は、恥じらいを知ったときに神によってエデンの楽園から追放されたが、だからこそ他の動物たちとは異なる存在になり、人間として社会をつくって生きていくことができるようになった、ということ。

エ 人類は、他の動物とは異なる存在として生きていくために神に背いてまで知識を得、罰として羞恥心を持たされたが、そのおかげで社会の中で守られて生きていけるようになった、ということ。

問七 本文の内容と一致しているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人間の先祖は、羞恥心を知らなかったときは楽園で生きていたが、自分たちで社会を築くようになると羞恥心を知り、他人の目を常に気にしながら生きなければならなくなった。

イ 人間は、社会なくしては生きられないが、社会から排斥されそうな振る舞いをするとうちを恥じらひを感じて振る舞いを修正することで、社会の中で生きることができている。

ウ 人間は、社会なしに生きていくことはできないため、恥ずかしい行為をして所属集団から排斥されないように、自分の行動を監視し、問題があれば直ちに修正することが必要である。

エ 社会的動物である人間は、自分が所属する組織や地域から排斥されると生きていけなくなるため、自尊心と羞恥心を利用して、自分たちの身を守る制度を整えていった。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

(これまでのあらすじ) 高校三年生の「私」(橘ゆみ子)は、高校に入学してすぐ、同じクラスになった小嶋サトと親しくなり、毎朝同じ電車で通学してきた。サトは華やかで、「私」だけでなく皆を引きつける力があつた。しかし、サトは、二年生になるとあまり授業に出なくなり、登校しても保健室で過ごすことが多くなっていた。ある日、「私」は、生物の神田先生から、サトが欠席する理由について尋ねられた。

実際、サトが授業に出なくなった理由が、私にはわからない。二年生になって、クラスが文系理系に分かれ、周りの顔ぶれががらりと変わったのが節目だったような気がするけれど、具体的になきっかけなんてまったく思い当たらない。

私とサトは理系の生物選択クラスで、自動的に一緒になった。理系はA組からD組、文系はE組からH組。私たちはA組だった。他に、もともとと同じクラスの女子はいなかった。玄関に貼り出されたクラス発表を見て驚いたけれど、サトがいれば平気だと思った。

でも、新しいクラスは、一年の時とは雰囲気(ふんいき)が別物だった。にぎやかで活気のあるクラスに見えながらも、実は教室で騒いでいるのは一部のグループの人だけだった。クラスは完璧(かんぺき)に二分され、一方が大きな顔をし、一方はじつと目を伏せていた。新しいクラスでの初日、「何だか、なじめない気がする」とサトはつぶやいた。

そうして、一年の頃のようにサトの引力が発揮されることはなかった。口を開かなければ、サトはただの地味(ぢま)な女の子だった。可愛(かわい)かつたはずのサトの持ち物も、もう光らない。あれは、サトが皆に自慢気に差し出すからこそ意味があつたのだ。こっそり持っていたって仕方ない。噂(うわさ)なんかはなおのことだ。そんなわけで、誰もサトを見なかった。サトに声をかけなかった。私は何人か、世間話をする程度の友達をつくったけれど、サトは私以外の人と口をきくことはなかった。

あれは夏だったか秋だったか、全然覚えていないんだけど、二年生のある朝、サトは電車に乗ってこなかった。私もしばらく、サトが乗る駅を過ぎたことに気付かないでいた。次の、ウチの生徒がどつと増える駅に着いた時に初めて、膝の上に広げた参考書から顔を上げた。人の視線を感じたのだ。知らない男子と目が合(あ)って、慌(あわ)てて顔を伏せた。そこで気付いた。

——あ、サトがいない。

いつも必ずサトがいるはずの席が空いたせいで、私の横顔にはいくらかの目が集まっていた。ぐるりと周りを見渡してみた。車両のどこにも、サトの姿はない。初めて電車に乗った日の不安が、胸にぼつりと湧(わ)いた。

風邪だろうか、と思う。けれどもサトは、休む日には担任への連絡(れんらく)依頼もかねて、うちに電話をよこすのだ。それが無いということは、

寝坊して乗り遅れたのか。

この電車の他に、私たちが乗れる「通学電車」は一本しかない。四十五分後の一本。でもそれに乗ると、駅前の高校に通う子たちは余裕でも、駅から離れたうちの高校だと、朝のHRには間に合わない。どうするつもりなんだろう。

結局私は、最後までうつむいて一人、電車に揺られていた。隣の子たちのお喋りが、変に耳に障った。長かった。

サトは、二時間目から登校してきた。いつもの電車の二つ後、九時台の電車に乗ってきたらしかった。そして大あくびをしながらこう言った。

「最近朝起きるのつらくてさあ。七時前の電車、間に合うか微妙なのね。だから橋、私が来なくても気にしないで先に行つてて？」

② 気にしないで、の一言が引つかかった。ずっと一緒に電車に乗ってきたのに、サトは、別に私と乗らなくてよかったのかな——そう思った。サトは私がいらないことくらい、気にしないでいられるんだろうか。私は、そうはできないのに。

でもそれは、私のわがままでしかないのだ。サトが起きられないと言ったら起きられないだろうから、私は、小さい石ころを飲み下すようにして言った。

「わかった。でも、大丈夫なの？ サト、最近具合良くないみたいだし、無理しないでね」

ありがと、とサトは眉根を寄せたまま力なくうなずいた。

それから、サトは遅刻が多くなり、遅刻しないで私と一緒に登校した日も、教室に行かずまっすぐ保健室に行くようになった。私は、一人で登校するのが普通になった。しばらくすると、もっと後の駅、座れないくらい混み出す辺りで乗ってくる、同じクラスの子たちが話しかけてきてくれた。それでお喋りの相手はできたけれど、やっぱり「一人で通っている」という気持ちは消えなかった。私はサトが来た時のために、ちゃんと横に荷物を置いて、隣をとられないようにしていたのだ。サトの駅を過ぎるまでは。

結局、何かが変わり始めたのはその辺りなんだろう。けれども私には「節目」しか見えない。「④」とか「⑤」だとか、そういうものは一切見当たらないのだ。

生物Cコウギ室を出ると、特別棟から玄関、教室棟、体育館までをつらぬく廊下が延びている。購買の前の人だかりは引き始め、ざわめきはいくぶん遠くなっていた。中庭を望む窓が開け放されており、ゆるゆると陽だまりの空気が流れ込んできている。私は窓枠に手を掛け、そーっと息を吐き出した。息は周りの空気よりいくぶん熱かった。中指で、さつき汗を噴いた額の辺りに触れてみる。わずかにシメついているような気はしたが、濡れてはいなかった。

窓の外には、背の低いもみじの木があつて、幼い緑色の葉をちらちらと揺らしている。きれい、と思った。肩や、耳の付け根に入っ

た力が抜けるのがわかった。

ふと、もみじの葉の向こうに、サトの姿を見つける。そう言えば、保健室も中庭に面しているのだった。サトの背にはあのベッドのついでが見える。窓の中で、サトは目を細めてもみじの葉を見ていた。

何、考えてるの、サト。

やっぱり、葉っぱを見ながらきれいって思っているんだろうか。でも、サトはただ外を眺めているだけで、全然別のことを考えているのかもしれない。私には知るよしもない、サトの中の悩み事について、とか。或いは、今日は教室でお弁当を食べようか保健室で食べようか、考えているのかもしれない。

サトが、何の前触れもなしにふっと目を伏せた。それは、サトが下がり目だからとかじゃなくて、純粹じゆんすいに悲しげに見えた。私は反射的に身を乗り出して叫ぼうとした。——サト！ 何にも考えてなかった。ただ思い切り息を吸い込んだ。

けれど次の瞬間、私はその息を止めることになった。ついたての陰Eから、女の子が一人躍り出て、サトの肩にぽんと触れたのだ。さつき保健室に残っていた、二年生の女の子だった。サトは振り返って、私からはその顔が見えなくなった。でも、わずかに見える右の頬がちょっと上に動いて、サトが笑ったのがわかった。吸い込んで止めた息が、私の胸を潰した。^⑦

豊島としまミホ 『檸檬れもんのころ』より

問一 二重傍線部A～Eのカタカナは漢字に直し、漢字には読みがなをつけなさい。

問二 波線部ア～エのうち、品詞の違うものを一つ選び、記号で答えなさい。

問三 傍線部①「隣の子たちのお喋りが、変に耳に障った」とあるが、このとき「私」がこのように感じた理由として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア いつもは一緒に電車に乗るサトの姿が見えないので心配になり、サトを呼びに引き返そうかと迷ったから。

イ サトが何の連絡もなく電車に乗ってこなかったので不安になり、孤独であることが強く意識されたから。

ウ サトが電車に乗ってこないのは何かあったからだと思われ、原因を突き止めることに集中したかったから。

エ サトが連絡もなく電車に乗ってこなかったことに衝撃を受け、サトが離れていきそうな予感がしたから。

問四 傍線部②「気にしないで、の一言が引かなかった」とあるが、このとき「私」が思ったことを、「と思った。」に続くように、本文中の語句を用いて、五十字以上五十五字以内で書きなさい（句読点を含む）。

問五 傍線部③「私は、小さい石ころを飲み下すようにして言った」とあるが、このときの「私」の気持ちの説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア サトの言葉に反射的に不快感を覚えたが、今は自分の感情をぶつけてサトと言い争うときではないと思い、この場は引き下がろうとしている。

イ サトの言葉を聞いて傷ついたが、彼女が離れていこうとしているならそれも仕方がないと思い、サトとつき合ってきたことを後悔している。

ウ サトの言葉は事実ではないと直感したが、だからといって自分から何かができるわけでもないと思い、この場を適当にかわそうとしている。

エ サトの言葉には納得できなかったが、それ以上サトの内面に立ち入ることをしてはいけなないと思い、無理に自分を納得させようとしている。

問六 空欄部 ④・⑤に入る適当な語句を、④は四字で、⑤は二字で、本文中から抜き出さない。

問七 傍線部⑥「私は反射的に身を乗り出して叫ぼうとした」とあるが、これより前の、保健室にいるサトの姿を見つけた時点では「私」はサトを呼ぼうとしなかった。そのときの「私」の気持ちを表している表現を本文中から十一字で抜き出さない（句読点を含む）。

問八 傍線部⑦「吸い込んで止めた息が、私の胸を潰した」とあるが、このときの「私」の気持ちとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 悲しそうなサトを今救えるのは自分だと意気込んでいたのに、自分が叫ぶ前に二年生の女の子がサトに声をかけてサトが笑ったようだったので、心配するほどのことはなかったと思って安心している。

イ サトが悲しそうだったので思わず声をかけようとしたが、二年生の女の子がサトの肩に触れてサトが笑ったので、気持ちがくじか

れ、サトが遠くへ去ってしまったようで寂しく思っている。

ウ サトの悲しげな表情を見て、どうしてもサトを助けずにいられないと思ったのに、先に二年生の女の子が肩に触れてサトが笑ったので、必要以上に気負っていたことをばからしく感じている。

エ サトの悲しげな表情を見た瞬間、何も考えずにサトに声をかけようとしたが、二年生の女の子が声をかけてサトが笑ったので、自分がサトを独占しようとしていたことに気づいて自己嫌悪を覚えている。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

中比、三井寺にわりなく貧しき僧ありけり。念ひわびて思ふやう、「かく所縁のなきなめり。かくしも思ふ事の違ふべきかは。我、外へなかくろ 注1
そこう遠くない昔 ひとく 思い悩んで おち このように貧しくなるいわれはない

行きて、宿世をも試みん」と思ひて、昼などは、旅姿もあやしければ、暁出で立つほどに、夜ふかく起き、道の程もわづらはしかるべしとしゆくせ
前世からの因縁がどうか試してみよう みすほらしかったので あかつき 出立しようとして 大変だろ

て、しばしよりふしたる夢に、色青み、瘦せおとろへたる、わびしげなる冠者、我と同様に藁ぐつはきなど用意し、いみじう出でたつあり。横になつて寝た くむじや 若者 ひどい姿で

さきさきも見えぬ物なれば、あやしくて、「おのれは何者ぞ」と問ふ。「年来候ふものなり。いつも離れ奉らぬ身なれば、御伴申し候はんみづかき
見ることのない者なので 不思議に思つて 長年おそばにいる者です

とて出で立ち侍る」と云ふ。僧の云ふやう、「さる物やはある。名をば何と云ふぞ」と問へば、「人々しき身ならねば、異名侍り。ただうちはやく
そんな者がいたのか 注2 一人前の身ではないので

見る人は、貧報の冠者となむ申し侍る」と云ふと見て夢さめぬれば、即ち、身のつたなき宿世を知り、「いづくへ行くとも、此の冠者が添すなは
一緒

ひたらんには」と思ひて、外心改めて、あやしなから、本の寺にぞ住みける。ほかにこころ
③ よそに向けた心 貧しいままで

『発心集』より

注1 三井寺 … 現在の滋賀県大津市にある寺。正式名称は園城寺。

注2 異名 … 本名とは別に、特徴などに基づいて付けられた呼び名。

注3 貧報 … 前世の行いの報いとしての貧しさ。

問一 波線部A「出でたつ」、B「見て」の主語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 僧 イ 冠者 ウ ただうち見る人 エ 作者

問二 傍線部①「我、外へ行きて、宿世をも試みん」とあるが、僧がこのように考えた理由として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 今の自分がひどく貧しいのは前世からの因縁いんねんなのかと思い、どのような因縁なのか試してみようと思ったから。

イ 今の貧しさは前世からの因縁でどうしようもないが、来世になら期待できるか試してみようと思ったから。

ウ 今貧しいのは住んでいる場所のせいだと思い、前世からの因縁でここに来たのか試してみようと思ったから。

エ 今貧しい理由がわからず、僧でなくなったら前世からの因縁が断ち切れるのか試してみようと思ったから。

問三 傍線部②「わづらはしかるべし」を現代仮名遣いに改めて、すべて平仮名で書きなさい。

問四 傍線部③「本の寺にぞ住みける」とあるが、僧が「外」へ行くのをやめて「本の寺」にそのまま住もうと決めたのは、夢の内容によると考えられる。僧が夢で聞いた内容で僧の判断の決定的な根拠となった言葉を、本文中から五字で抜き出しなさい。

問五 本文の内容と一致しているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 僧は、貧しさに耐えかねて寺を出て他の場所へ行こうとしたが、貧しくて旅の身支度もままならず、道中が大変なのを承知のうえで、人に姿を見られない夜ふけに出ていくことにした。

イ 僧は、寺での暮らしが貧しいことに納得がいかなかったが、いかにも貧しそうな若者が長年僧のそばにいたと言うのを夢に見て、この若者を寺から追い出さなければならぬと思った。

ウ 僧は、寺から出ていこうとしたとき、長年そばにいたといういかにも貧しげな若者がついてこようとしているのを夢に見て、そんな者がついてくるならどこへ行っても同じだと思った。

エ 僧は、貧しい暮らしにもう耐えられないと思ったが、長年貧しい暮らしにともに耐えてきた若者がこのまま寺で僧と一緒にいたいと言ったので、寺から出ていくことはできなかった。